

課題 よろこび

奇跡の一枚

人物

武藤 晴美 (48)

武藤 真澄 (48) 晴美の夫

武藤 亮輔 (17) 晴美の長男

武藤 亜侑美 (22) 晴美の長女

箕島 琴音 (43) グループホームひまわ

り畑のマネージャー

親戚の女性

○ 武藤家リビングダイニング（朝）

戸棚の引き出しが何段か引き抜かれてその奥の空洞をあらわにしている。紙が擦れるようなワサワサという音がどこからか聞こえてくる。床の上には書類や紙が重なっていくつかの小さな山を作っている。武藤晴美(48) がフロアリングであぐらをかき、一握りの厚さの紙の塊を左手で掴み、右手で一枚一枚ひきはがしている。

晴美のN「落ち着け。と私は私に言い聞かせていた。まだ猶予は数日ある。あの奇跡的な一枚。はじけんばかりの母の笑顔。私はあの写真を探し出すために今生きている」

電話が鳴る。晴美が一連の動きを止め、電話に出る。

晴美「もしもし・・・あ、お兄ちゃん？うん今猛烈に探してる・・・大丈夫、きっと見つかる。最近の写真なのに昔の母さんみたかったの。あれを遺影にしてあげたい。」

あ、お通夜の段取りとか確認お願いね」
晴美が喋りながら床の上にある紙の重
なりの上に手を置き、斜めに滑らせ扇
形に広げる。

○同・リビングダイニング（夕）

薄暗い部屋の中で晴美が紙を仕分けて
いる。晴美の横には「グループホーム
ひまわり畑・書類・写真」と大きく黒
マジックで書かれた空の紙袋がある。
晴美が書類の上に置かれた箱の蓋をあ
け、写真を取り出し、一枚一枚を見る。
それぞれの写真にはぼんやりした表情
の笹間美津(74)の姿が写っている。数
枚目の所で晴美が手の動きを止める。
その写真には大事そうにお人形を胸に
抱いた美津の姿が写っている。

晴美のN「もしも母親の絶頂期があるとすれ
ば、足元にまつわりつくほどの小さな子供
に疲れ果てているその時なのかもしれない。

母の記憶にある子供は、だからいつでも

『小さな私』なのだ」

○（回想）グループホームひまわり畑

簗島琴音(43) が美津のもとに駆け寄る。

琴音「美津さくん、はあちゃん来たよ」

晴美が食堂兼団らん部屋の入口で手を振り、ゆつくりと美津に近づく。

晴美「かあさん、えっと美津さんこんにちは」

人形を抱いた美津が、いたずらっぽいで目で琴音を見上げる。

琴音「美津さんね、このお人形に、「はあちゃん」って話しかけてたんですよ」

晴美が少し驚いた表情を見せた後に、

晴美「その子、はあちゃんなんだ。可愛いね」

美津が何も言わずに人形をきゅっと抱きしめ、頬を寄せる。

○元の武藤家リビングダイニング（夜）

武藤真澄(48) がダイニングテーブルで

ビールを飲んでいゝる。コップを片手に床の上の晴美の方を見る。晴美が一枚の写真を両手で掲げ、じつと見入っている。

武藤 「おつ、例の写真、見つかったのか！」
晴美が顔だけ振り向き首を横に振る。

晴美 「私ね、母の手が好きだったの・・・」

武藤 「んん？」

晴美 「手足の指ってさ、親に似ない？」

武藤 「うん、確かに」

晴美 「母さんの手に似てるのが嬉しくてね」

晴美が左手を目線まで上げて手の平、甲、と、交互に動かしながら、武藤の所に写真を持って行く。武藤がそれを見て、「ほーっ」と言う。そこには睦まじく絡み合っている二つの手が大写真に写っている。

晴美 「私と母さんの手・・・こんな撮ったのすっかり忘れてた」

しばらく無言で写真を見る二人。

○同・リビングダイニング（朝）

朝日が東側の出窓から差し込んでいる。
朝日に照らされながら晴美が黙々と封
書や手紙、書類等を分類している。

○同・リビングダイニング

晴美の丸い背中。階段を下りてくる足
音。リビングのドアが開き武藤亮輔

(17) が入ってくる。晴美が顔を上げる。

晴美「今日は弁当ないよ。おばあちゃんの奇
跡の一枚、まだみつからないんだ」

亮輔「確かなの？誰かにあげちゃったとか」

晴美「それはない。感傷的にずっと眺めてた
の覚えてるもん。で写真立てに飾ろうか迷
った挙句どこかにしまっちゃったことも。

その場所がねえ・・・いったいどこやら・・・」

亮輔「腹空かない？俺チャーハンでも作ろう
か？」

晴美「えっ、いいの？じゃお願い」

晴美が伸びをして、また紙の山に向き合う。

○ 同・キッチン

亮輔が中華鍋をささらで洗っている。
リビングから晴美の声

○ 同・リビングダイニング

晴美が色紙を片手にキッチンの方に呼びかける。

晴美 「亮！ちよつと来て」

亮輔がのっそり現れる。

晴美 「けっこう辛かったのよ、私・・・でもこの色紙に救われた。読んでみて」

晴美が亮輔に色紙を渡す。色紙には

「美津さん、お誕生日おめでとう」の大きな文字の周りに、たくさんの言葉が書かれている。

晴美 「右下の琴音さんの読んでみて」

亮輔が色紙を読んでいる。

琴音の声「美津さん、75歳のお誕生日おめでとう！人の心がわかる美津さん。無理に明るくしていても美津さんにはばれてしまう。何度も励ましてもらって、今の私がいま。本当に感謝してます。可愛い美津さんが大好きです！」

亮輔が色紙から顔を上げる。

亮輔「ばあちゃんすごいじゃん」

晴美「うん・・記憶が壊れてもね、なんかまた別の所でいろいろ感じてるんだなって」

亮輔がうんうんうんとうなづく。

晴美「あんたさー、料理腕上げたねえ」

亮輔「好きなんだよ、料理作るの」

晴美「そっかあ・・」

亮輔がしやがみこみ紙の一山を手に取り分類し始める。

×××

晴美が右手で左の肩を叩きながら時計を見る。時計は5時を指している。

晴美「あとは和室の箆笥の小さな引出二個だ

けだ・・なかつたらどうしよう・・」

亮輔「俺持ってくるから」

×××

亮輔が引出二個抱えて戻ってくる。

晴美「じゃあんだ、そっちお願い」

晴美と亮輔が引出の中をゴソゴソと探し始める。亮輔がポケットアルバムを取り出しパラパラとめくる。

亮輔「これ亜侑美の成人式の時のじゃん・

わっけーな・・」

ページをめくっていた手が止まり、ゆっくりと晴美の方を見る。晴美がそれに気が付き、ポケットアルバムの方向を傾けた途端、喜びの表情。

晴美「あつた・・あつた・・あつたあつた！

あく嬉しい！ほんと嬉しい！」

晴美が亮輔の頭や肩をボカスカ乱打する。

亮輔「いってえ・・何すんだよやめろよ・・」

晴美「よかったよかった・・」

晴美が亮輔の頭をポンポンと叩く。
美津の笑顔の写真。ひまわりが太陽に
向かってにっこりとほほ笑んでいるよ
うな笑顔がそこにある。

○セレモニー・鴨志田（夕）

礼服を着たスタッフらしき人達があわ
ただしく行き交う。礼服を着た晴美と
武藤が現れる。正面をじっと見ている。
二人の視線の先には生花で囲まれたお
棺の上部にはじけるような美津の笑顔
の遺影が飾られている。

武藤「いい写真だ」

晴美がゆっくりとうなづく。武藤亜侑
美(22)と亮輔がそれぞれ武藤と晴美の
横に立つ。亮輔が穏やかな表情で美津
の遺影を見つめる。

晴美のN「葬儀中に喜びを感じるなど、不謹
慎極まりないと承知の上で、私はその時と

ても晴れやかな気持ちでいた。三日間探し続けてやっと見つけた母の笑顔がそこに輝いている。」

晴美の肩を一人の女性が叩く。晴美が振り向くと二人でお辞儀をしあう。遺影を指さしながら話し出す二人。

晴美のN「長年連れ添った夫の死も理解できない母を、哀しみ憐れんだあの頃。私を娘だとわからなくなったとき、私の中で母はすでに一度死んでいた」

女性が亮輔を見上げ、楽しげに首を振っている。こんな小っちゃかったのに。とでも言ってる風に、自分の手の平を腰のあたりに浮かせる。女性と亮輔が笑顔で話し出す。

晴美のN「死によつて、障害のあった体から解放された母は、昔の母に戻っているのではないか・・・その思いつきに私は救われた。私は今母を、より身近に感じている」

美津の弾けんばかりの笑顔の写真。